

**プラットフォーム**：ニコニコ生放送（Zoomの画面を加工して配信）

**体制**：堀成美氏（国立国際医療研究センター国際感染症センター）、未来館のSC 8人、調整担当スタッフ1人、科学コミュニケーション専門主任（現場責任者）1人。

8人のSCのうち、毎回1人がファシリテーターとして出演、2人が資料の共有、視聴者コメントのチェック、運営コメントの入力を担当。スタッフと専門主任は毎回、待機し、必要に応じてSCへの指示出し、運営コメントの入力など。

**放送時間**：2020年4月1日～5月29日（臨時休館中）：正午～原則30分（月～木）、2時間（金）

2020年6月以降（おもに開館中）は週1回→隔週1回→不定期→週2回（第4波の臨時休館中）→月1回で2021年9月まで

**配信場所**：各自の自宅から（堀氏とゲストは自宅、勤務先など）

## コロナ関係資料の収集と博物館の役割

浦幌町立博物館  
学芸員 持田 誠

浦幌町立博物館は、北海道の東部、十勝地方と釧路地方の境目に位置する、十勝郡浦幌町が設置した、公立の登録博物館です。当館では、新型コロナウイルス感染症の流行が、地域の生活にどのような変化を起しているか？という記録になるような資料を「コロナ関係資料」と呼び、継続的な収集を行なっています。いま、全国各地で、こうした新型コロナウイルスに関係する資料の収集が、さまざまな課題を乗り越えつつ試みられています。

### ■マスク騒動に関係した資料

新型コロナウイルスが流行するこの時代を象徴する資料として、「マスク」があります。社会現象ともなった「マスク騒動」は、オイルショック時代のトイレトーパー買い占めなどに匹敵する歴史的な現象として、今後長く語られていくに違いないと、また語り継がなければならないものと思っています。

感染拡大防止のため、マスクが必須となった当初、お店のマスクに人々が殺到し、やがて品切れとなってしまって手に入らない状況が続きます。そうして人々は、買えないマスクを手づくりするようになりました。しかし、すぐにゴム紐やガーゼも手に入らなくなります。

そこで、「お父さんのワイシャツを切り、キッチンペーパーをガーゼ代わりに、ストッキングを細く切ってゴム紐代わりに作った」というマスクが現れます（図1）。これを目にしたとき、「第二次世界大戦後の物資窮乏時代ならともかく、21世紀も20年を経た今日に、こうしたことが起こるのか？これは収集しなければ」と、驚きとともに心の底から収集意欲が沸き立ったことを覚えています。

図2は、町の方がつくった「マスクの作り方」が書かれたピラです。マスクが店頭から消えたあと、人々は手近にある材料でマスクをつくろうとしますが、そもそも自分でマスクをつくった経験がない人がほとんどでし



図1

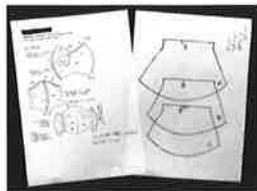


図2

た。そうした人々を見て、洋服の仕立てなどの経験のある町の有志が「こういうふうにつくるといいよ」という「マスクの作り方」を、自分で印刷して、郵便局のATMの脇だとか、駅の待合室とかにそっと積んでおく光景が見られました。マスクそのものとともに、「マスクをみんなで作るぞ」という情報の共有が自然発生的に広まっていくというのも、ひとつの時代的な現象と思ひ収集しました。

突然のマスク騒動や、先の見えない感染症で閉塞感のただようなか、少し遊びの企画をしようと、人々に呼び掛けて手づくりマスクの展示会を開催したこともあります。「コロナ時代のマスク美術館」と題した企画展には、地元だけでなく、全国からたくさんのマスクが寄せられました（図3）。



図3

### ■現代資料の収集と博物館

浦幌町はいま、人口が4,400人ほどの、過疎の町です。市街地の商店の多くは撤退し、スーパーマーケットは1軒しかありません。若い世代は帯広市近郊まで自家用車で買い物に行き、それが出来ないお年寄りなどの家には、週に一度、生活協同組合（コープさっぽろ）の配送車が生活必需品の宅配に回ってきます。

こうした、時代による町の産業構造の変化を示す資料として、当館では従来から、新聞折り込みチラシの収集を行ってきました。今回のコロナ関係の資料の収集は、もともと日常的に行っていた折り込みチラシ収集等の延長線上にあるもので、実は当館としては新しいことを始めたという意識がありませんでした。

北海道が独自の緊急事態宣言を出した2020年2月ころから、この折り込みチラシの量そのものが減っていきます。町の新聞販売店から、それを示す日々の折り込みチラシの記録も寄贈していただきました。やがてその内容も、世の中の閉塞感をあらわすようなものに特化していきます（図4）。そうした傾向が顕著となるにつれ、これは従来の資料分類とは別な枠組みで、コロナな時代を意

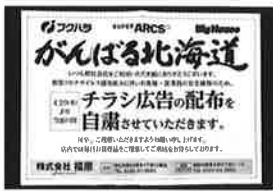


図4

識した資料収集を進めた方が  
良いのではないかと考える  
ようになったのです。

また、こうしたリアルタイムな資料を集めるきっかけとして、以前に小樽市総合博物館

の石川直章学芸員(館長)を講師として開催した「いまを集める博物館」という、いわゆる「考現学」をテーマとした博物館講座からも、大きな影響を受けています(この内容については、2012年に発行された日本博物館協会の雑誌『博物館研究』第47巻第9号に掲載の、石川直章著『「今」を記録する地域博物館』をご覧ください)。

「学校の卒業式にどんな歌を歌っているか?」を、会場に貼り出された次第を集めることで記録したり、「お祭りの露店にどんなメニューがあるか?」を、毎年お祭りをまわって屋台を見ながら記録していくという取り組みが、とても新鮮で印象に残っています。地域博物館が「地域を記録する」ということの意味を、石川学芸員の講座から学び、自分の中での意識を変える大きなきっかけとなりました。

では、こうした現代資料は、歴史資料になるのでしょうか? 風俗民俗資料になるのでしょうか? 実は集め始めた当初から、「いまだ歴史的な評価の定まっていない資料の収集は、歴史学の対象とはなり得ないのでは無いか?」という議論がありました。このため、すべての博物館がコロナ関係資料の収集に取り組んでいる訳ではありません。各博物館の方針や事情に応じて、収集できるところが収集しているというのが現状です。

いっぽう、コロナ関係資料にいち早く着目したのが、社会学の研究者でした。従来、当館は歴史学や民俗学の研究者との繋がりはありませんでしたが、社会学者との接点はそれほどありませんでした。しかし、現代社会の課題を多角的に記録・分析する社会学との接点が、今回の資料収集を通じて新たに生まれたことは、当館にとって大きな出来事でした。

地域の資料を学術資源として昇華させていくことは、博物館の大きな役割のひとつと考えています。収集を通じて、あらたな学問分野と資料との接点が生じたとすれば、地域博物館の存在意義をひとつ果たしたと言えるかなと考えているところです。

#### ■ネットワークの重要性と国立博物館での特別展の必要性

地方と都心では、同じ時代のコロナに対する世の中の変化といっても、だいぶ違うものがあるのではないかと考えています。

たとえば浦幌では、テイクアウトという文化がそれほど発達していませんでした。それが、感染拡大防止のために外食はよくないという風潮になり、対策として、町内のほぼすべての食堂や居酒屋でテイクアウトがされる

ようになりました。

市町村立レベルの博物館と都道府県立レベルの博物館でも、同じ「コロナな時代」について、おそらく見ている風景や感じている空気が異なるのではないかと思います。これを今後いかに体系化していくかが課題だと感じています。これまで偶発的・散発的に収集してきたコロナ関係資料ですが、今後は都心なら都心、地方なら地方で、どのように記録化をはかっていくべきなのかということ、整理していくべき段階にあると考えているのです。

いま全国で、どれくらいの博物館や図書館がこの資料を集めているのだろうか、よくわかっていません。北海道内でも、断片的に「うちでこういうのを集めていますよ」という情報は入ってはいますが、全容がまだよくわかっていないのが現状です。

このため、当館では当初、浦幌町の資料だけを集めようと考えていたのですが、現在は全国どこの資料でも、送られてきたものは原則受け入れるようにしています。いまはあえて地域を限定せず、今後、ひととおりに集まった段階で、適切な資料の保存先については個別に各地方の博物館と交渉して、振り分けを行っていかうと考えていますが、逆に「どの地域でどのような資料の収集が足りていないのか?」といった情報の共有と、資料保存学的な体系化が急務に感じています。このため、コロナ関係資料の収集・保存に関するネットワークの構築が重要な課題でしょう。

同時に感じているのが、国立博物館規模でのコロナ関係資料に関する特別展開催の必要性です。これまで、いくつかのオンライン研究会などで、コロナ関係資料の収集に取り組む全国の学芸員や研究者との情報交換に参加させていただきました。そこで感じるのは、そろそろ全国で収集・記録されたコロナ関係資料を、一度1ヵ所に集めて展示し、この間なにが記録できていて、なにが欠けているのかを、全国規模で検証する機会を持つべきではないか? という焦りのような思いです。

浦幌町のような、小さな地域コミュニティでの資料をバラバラに収集しているだけでは、100年後、歴史を振り返る際の資料としてはあまりにも偏った断片のサンプルにしかならないでしょう。日本社会でコロナな時代を市井の人々がどのように切り抜けてきたか? を将来振り返る際、「地域」の生活実相を資料として集めておくことも重要ですが、より広範囲に社会を総覧して時代性を検証する場も重要です。ぜひ今後、国立博物館と地域博物館が連携して、日本という視点からの「コロナな時代」の資料記録を総覧する場を築いていきたい、というのが、地域博物館でコロナ関係資料を集めている私の実感です。

浦幌町立博物館HP <https://museum-urahoro.jp>

浦幌町立博物館非公式Twitter <https://twitter.com/urahoromuseum>

# 全科協 News

vol.52  
NO.6

特集

## コロナに関する サイエンスコミュニケーション

### CONTENTS

- P2 ▶ 特集
- P10 ▶ 海外博物館事情
- P12 ▶ 11月12月の特別展等
- P14 ▶ 新規加盟館紹介
- P15 ▶ リニューアル情報
- P16 ▶ トピックス

# JCSM

Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718 東京都台東区上野公園 7-20 国立科学博物館内  
TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9899  
<https://jcs.jp/>

## 武雄に出現した巨大オウムガイ



佐賀県立宇宙科学館HP  
<https://www.yumeginga.jp/>

当館は「宇宙から地球・佐賀を発見、佐賀から地球・宇宙を発見」をテーマとし、地球発見ゾーン、佐賀発見ゾーン、宇宙発見ゾーンの3つの展示ゾーンがあります。

当館を上空から見ると、円形で渦を巻いているように見えます。この形は、佐賀県で発見された国内最大級のヨコヤマオウムガイの化石をイメージして設計されました。佐賀発見ゾーンには、ヨコヤマオウムガイ以外にも佐賀県内外から発見された数多くの化石を展示しています。



次回執筆者は、鳥取県立博物館 田邊 佳紀さんです。

## リニューアル情報のご提供をお願いします

最近(近年)リニューアルした展示、コーナー等がありますか？

もし、リニューアル行いました！という館・園がございましたら、ぜひ全科協ニュースへ情報をご提供ください！

全科協ホームページの投稿フォームからご投稿いただけます。

もしくは、事務局([info@jcsm.jp](mailto:info@jcsm.jp))までお問合せください。

また、併せて特別展等の情報もご提供お待ちしております。(次号は1月2月開催分になります)

皆様のご投稿お待ちしております。



全国科学博物館協議会

### 全科協ニュース編集委員

石浜佐栄子(神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員)

井島 真知(バルナール・ビュフェ美術館学芸員)

西田 雅美(公益財団法人日本科学技術振興財団  
科学技術館運営部主任)

平田慎一郎(きしわだ自然資料館学芸員(参事))

弘田 澄人(川崎市青少年科学館(かわさき宙と緑の科学館)  
天文担当係長)

野村 篤志(国立科学博物館展示開発・博物館連携グループ長)

### 全科協事務局

国立科学博物館

科学系博物館イノベーションセンター

(担当:中山・堤・嘉村)

TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9899

[info@jcsm.jp](mailto:info@jcsm.jp)

発行日 2022年11月1日

発行 全国科学博物館協議会 ©

〒110-8718

台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 株式会社セイコー社